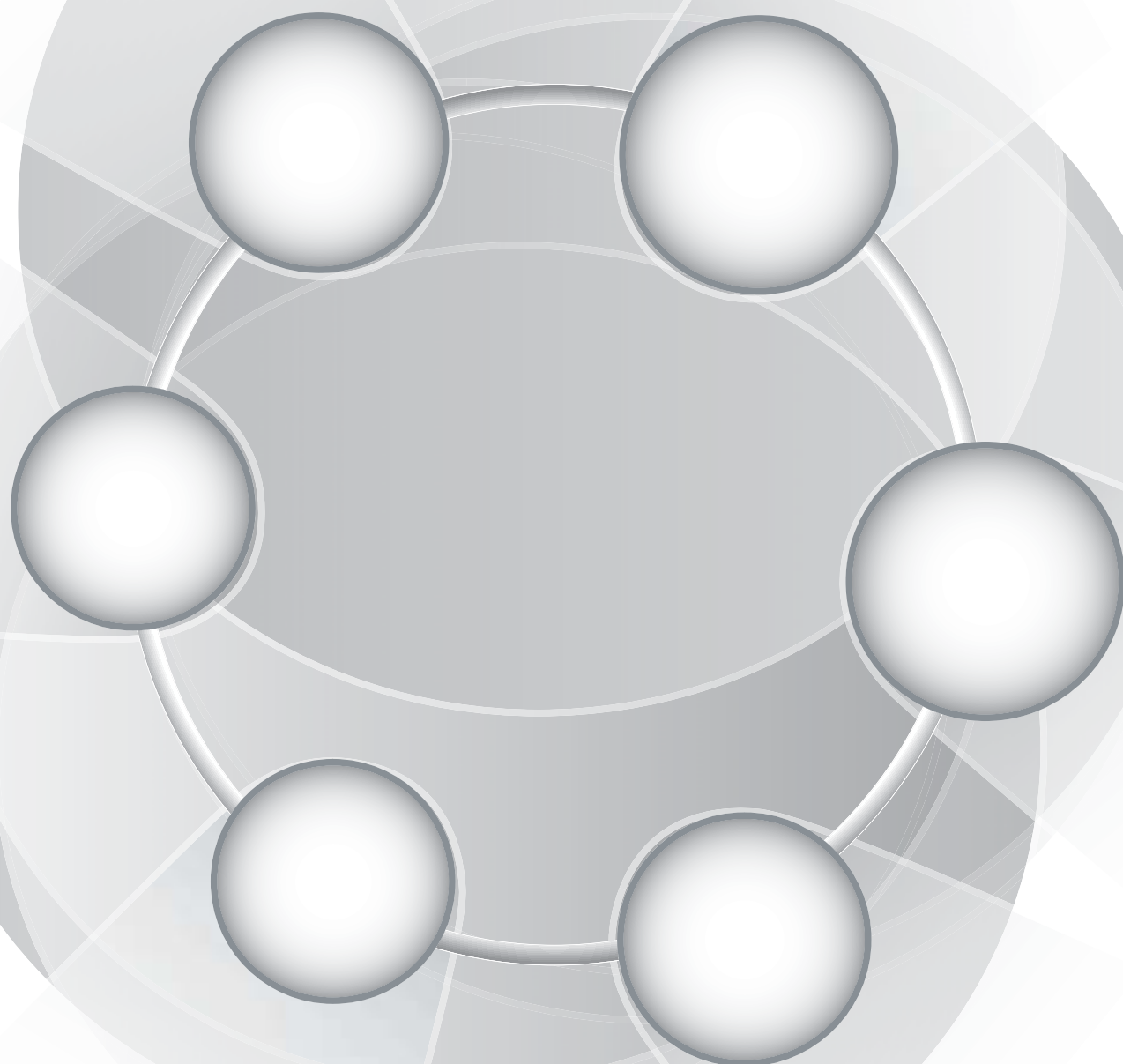


# 居場所交流全国フォーラム2004

- for Youth Alliance -

事業報告書



## 目次

はじめに.....	1
このレポートについて.....	2

### フリートークの記録

トピック1 なぜ子どもと関わる現場に記録・ふりかえりが必要なのか.....	4
トピック2 スタッフ同士が支えあうための記録やふりかえり.....	6
トピック3 居場所における「健全育成」という視点.....	10
トピック4 記録・ふりかえりの活かし方.....	12
トピック5 記録とのつきあい方.....	14
トピック6 「子どもとのために」だからこそ 記録やふりかえりは続けることができる.....	16

### 話題提供ノート

#### 居場所スタッフ育成の試み

～スーパービジョンをもって関わる～.....	18
------------------------	----

京都府南青少年活動センター 相談関連事業専門員 辰巳 朋子

#### 保育の現場における人材育成とは？

～ふりかえりと目的にあわせた記録のとりかた～.....	24
-----------------------------	----

大妻女子大学 家政学部 児童学科 助教授 岡 健

キーワード集.....	32
-------------	----

当日プログラム.....	34
--------------	----

参加者アンケート.....	35
---------------	----

実行委員会の取組み・主催団体紹介.....	36
-----------------------	----

# はじめに

このフォーラムが目指していたのは、「子ども・若者の居場所」をテーマとして現場に仕事としてかかわるスタッフが、他の活動との出会いを通じ、互いに学びあい、経験の共有をする機会をつくることです。

今回は、前回開催時に関心の高かったテーマのひとつ「スタッフの育成」に焦点をあてました。現場のスタッフの育成において、「記録」や「ふりかえり」はかかせないと言います。いつ、誰と、どのように共有するか、また自らのなかにどのように位置付けるかによって、それぞれのあり方が変わってくるようです。参加されたスタッフがどのように活用しているか、またスタッフ同士でどのように共有しているか等、スタッフの力量形成につながる「ふりかえり」のあり方について探ってみました。

今回のフォーラムは、参加者同士の活動紹介の時間、並びに意見交換の時間を多くとる事を重視しながらも、ふりかえりやスタッフの育成に関する話題提供の時間を設けることにしました。前回同様、広範な地域からの参加者を得て、実践者ならではの視点・話題が語られ、あっという間に時間が過ぎていきました。とりわけ「記録」や「ふりかえり」は、「子ども」のためでも「スタッフ」のためでもなく、ということがとりあげられました。皆さんの記録やふりかえりの整理に、一読して頂ければと思います。

最後になりましたが、長期にわたりこの企画を有意義にそしてより広くの方に参加をいただける様にご尽力頂きました実行委員会の皆様方とボランティア・インターンの皆さん、そしてお忙しい中全国よりお集まり頂いた参加者のお一人お一人に厚く御礼申し上げます。

また、この貴重な機会は米国ルーセント・テクノロジー財団の助成によって実現することができました。重ねて御礼申し上げます。

2005年11月15日

特定非営利活動法人 青少年育成支援フォーラム  
国内事業統括 鈴木祐司

## このレポートについて

このレポートは、フォーラム当日に参加者同士で話し合われた内容を事務局が整理・編集し、「ふりかえりや記録」をどのように位置づけ、どのように日常活動に活かすかという視点で6つのトピックに分けて掲載しています。また、合わせて当日話題提供としてご講演頂いた内容を続けて掲載しています。

最初のトピック1では、「記録やふりかえり」がなぜ必要と考えられるのかという視点にたち、子どもと向きあうことと「ふりかえり」について簡単な整理をしています。そのふりかえりが子ども達と向きあうスタッフ同士を支え合うツールになるという話がありました。しかし、いきづまった際等には外部の第三者を交えることで風のとおりが良くなる事もあるという辺りを整理したのがトピック2です。続くトピック3ではふりかえりを進めていくと直面しがちなものの1つとして「子ども観」のことが語られていたので、それをまとめてみました。

皆さんの活動では、「ふりかえり」というとどういうイメージでしょうか？トピック4では、「語る」と書くこと、それぞれの良さを活かしながらいかに「ふりかえり・記録」を活動に活かしていくかという点を整理してみました。

しかし、実際に「ふりかえり・記録」を活動に活かしていくとなると、「記録のための記録」になる危うさや、記録に縛られることもあるとの意見があり、「ふりかえり・記録」とのつきあい方についてトピック5として整理してみました。最後のトピック6では、改めて「記録・ふりかえり」をどう捉えるか、或いは何のためのものなのかという基本的な部分を整理してみました。

また、フォーラムにて話題提供をして下さった辰巳 朋子さん、岡 健さんお二人の内容を「話題提供ノート」として掲載してあります。

辰巳さんは京都市南青少年活動センターの職員として若手職員やボランティアスタッフを育成している経験をもとに、スーパーバイザーについての概念や実際の取組みについて紹介して下さいました。岡さんは、大妻女子大学の助教授として日々保育にあたる学生を養成する立場から、記録やふりかえりを「保育」の世界ではどのように捉え、現場ではどのような活用がされているかという事例を紹介頂きました。幼児を対象にした「保育」の世界と子ども・若者を対象とする「居場所」の世界のつながりは？と疑問に思われるかもしれません。しかし、自分の意志を言葉にして語る子が少ない幼児を対象にしているが故に「記録・ふりかえり」が大きな意味を持つ中で、「居場所」の現場で働いている方々に多く参考となるのではないかと思います。辰巳さんの実践と合わせて、是非ご一読をお勧めします。

なお、編集の過程で、似た趣旨の話が離れたページに掲載せざるをえなくなり、各トピック内の段落末尾に「【関連】」という記述を設けました。その段落に記述されたことの流れで読んで頂くとよいだろうという項目を表示してありますので、参考になさってください。

トピック6：  
「子どものために」だからこそ  
記録やふりかえりは続けることができる

トピック1：  
なぜ子どもと関わる現場に  
記録・ふりかえりが必要なのか

トピック5：  
記録とのつきあい方

トピック2：  
スタッフ同士が支えあうための  
記録やふりかえり

トピック4：  
記録・ふりかえりの  
活かし方

トピック3：  
居場所における  
「健全育成」という視点

話題提供：  
保育の現場における人材育成とは？

話題提供：  
居場所スタッフ育成の試み

## なぜ子どもと関わる現場に 記録・ふりかえりが必要なのか

子どもと“関わる”ことの意味とは？

大人が子どもに“関わる”ということには必ず意味がついてくるのではないのでしょうか。あえて関わるにしろ関わらないにしろ、また言葉をかけるにしろかけないにしろ、すべての関わりにおいて何らかの意味が生じてくるのだそうです。しかし、その多くは大人の主観の中で押し量られるものであり、危うさを秘めている可能性もあります。「自分（大人）のため」に関わるとそれは自己保身になり、「子どものため」に関わるとそれは押し付けがましきにもなりかねません。そうだとしたら、私たちは何のために、何を意識して子どもと関わればよいのでしょうか。また、どのような関わりをもっていけばいいのでしょうか？

【関連】 P.16・「子どものため」でもなく「自分のため」でもなく「子どもとのため」に

伝えたいことは

「私」の願いか、「大人」の願いか？

願いを持って関わるということは大人の思いを一方的に押し付けることになるのではないかという意見がありました。この意見に関して参加者の中から、「まず、願いの根本が何であるのかははっきりさせる必要がある」という声がありました。生じた願いというものが一般的な大人の願いなのか、それとも一個人（私）の願いなのか、また、大人が子どもに成り代わって立てた願いなのか、その願いの位置づけによって関わり方が変わってくるということです。

人と人との関係の中で、もちろん大人と子どもの関係においても、“受容する・受容される”という一方的な関係があるわけではなく、相手に「受け入れるよ」と思われて初めて受け入れられるという関係がお互いの中で成り立つという話が出ました。

そして「こう思うよ」とか「それ嫌だよ」「そうしてほしい」というようなことは、大人の世界でも多々あります。現場をはじめ、子どもと関わる中で「先生は」「大人は」といった三人称で、（一般的にいう）良きことのようなスタンスで語ってしまうことがよくあるのですが、それは一般的な「大人」の願いであって、一人称の「私」の願いではないのではないか？という指摘がありました。

「あなた（子ども）」と「私」が共に暮らす中で、受容関係ができ、その上で「それ、やっぱり嫌だよ」とか「それはそうしたほうがいいんじゃない」という一人称の「私」の願いが出てくるのであれば、その願いを一人称の「私」の願いとして子どもにわかってもらう努力が必要となってくるのではないのでしょうか。そして、本当にその願いを持つことがいいのかどうかということは、子どもとの関係の中で考えていくべきことなので、「自分はどうしたかったのか」を記録の中に書くことやふりかえることで自分の願いとして浮き彫りにできるのではないかという意見がありました。

主観による仮説だからこそ、  
ふりかえりが大切

子どもの願いや思いを大人の経験や解釈（主



観)の中で押し量る危うさをもちながらも、子どもと関わる時には、(あえて関わるにしても関わらないにしても)今ある主観をもって動くしかないのだとの意見がありました。それは、いくつもの選択肢を持っているままでは動けなくなってしまうからです。しかし、その働きかけはあくまで仮説に基づいたものであるため、それが子どもの願いに適合していたのかどうかを見極めるためには、関わったあとの子どもの様子を見る必要があるという指摘がされました。それは、関わったときまでしか子どもの様子を見ていないと、それが本当に子どもの願いであったのかどうかを判断する根拠がなくなってしまうからだそうです。だからこそ関わったあとの子どもの様子を記録などにとり、改めてふりかえることが大切になってくるのだと言われました。

スタッフとして子どもと関わっている中で「そうせざるを得なかった」という気持ちになることはスタッフそれぞれが経験するといいます。そのスタッフが他の行動なり言動を選ばなかった、選ばなかったのには何らかの理由が生じているのだから、端から見て少しくらい気になると感じて、その時その場所でのスタッフの気持ちを完全に否定するのではなく、やっぱりスタッフ同士で理解し合うとか共有、共感するという姿勢も大事なのではないかという声がありました。

その行動を呼び起こした背景の1つに「願い」というものがあげられました。その「願い」には一般的な大人の願いと一個人の願い、大人が子どもに成り代わって立てた願いがあげられました。これらの3つの願いと子どもと接している当事者の価値観によっても言動は変わってくるそうです。どんな背景をもって関わったにせよ、本人を含めたスタッフ全体がふりかえることで仲間の言動、1つ1つの背景を想像し、分かり合うことが必要だそうです。

“子どもが見えなくなること”に  
記録は歯止めをかける

スタッフ同士の関係性ができてくると、暗黙の了解の部分も増えていきます。それが増えれば増えるほど、綿密な対応が出来るけれども、その一方で子どもが見えなくなっていく可能性が出てきたり、お互いのシビアな関係が保たれなくなるのではないかと、という指摘がありました。例えば、事故のリスクに対する予測の甘さが出てくるということです。そして、それをある意味、ストップかけてくれるのは記録ではないかというような意見もありました。自分が子どもにどのような気持ちでどのように関わってきたのか、自分がこの場でどうしたいのか、また自分の視点が揺らいだ時に自分(達)の足元を見直すのに記録というものが活かされるのではないだろうかという意見もありました。

【関連】 P.12・ ふりかえりと記録の結び付き

文字に落とすことで  
自分と向き合える形にする

自分と向き合うために、日々の生活の中で起きていること、辛かったことを一人ひとりが書くという作業というのも大事なことはないかという意見もありました。その日あったことを持ち帰りたくないという感情、心の中に留めておくだけでは解決しにくいものでも活字に落とすことで整理され、ふりかえったり、他者と共有することで持ち帰れるものにする事ができるといったメリットを語った方もいました。

日々の自分の言動をふりかえったり、記録をとることは自分の成長を感じたり、自分の考えを見つめなおすいいアイテムだという声がありました。

【関連】 P.12・ ふりかえりと記録の結び付き  
/ P.17・ 記録やふりかえりは自分の想いを確認していくプロセス

## スタッフ同士が支えあうための 記録やふりかえり

### ..... 当然あるスタッフ間での視点のズレ

「誰でも受け入れる」というスタンスの居場所で、スタッフから「君は気になるから来ないでという権限がスタッフにはないのか」という課題提起があったという話がありました。他にも「あのやんちゃな子が来ると私たちはたまらないから、あなたのシフトの日に来てもらって。」と、1人のスタッフが突き上げられるような空気になった団体があったり、重度の精神障害者の受け入れをめぐる、スタッフと割れてしまったという話などがあがりました。居場所を共につくっていくスタッフ間での視点や思いのズレは様々な場面で起こっているようです。

このようなスタッフ同士の視点のズレは、少なからずあるものであり、それをなおざりにしたり、スタッフ個人の問題とつけ返してしまったりするのではなく、ズレの本質を分かち合い、どのように対処していけばよいかを考えることが大切なのだと言われました。

【関連】 P.10・ 居場所における「健全育成」という視点と葛藤

### ..... スタッフ同士の語り合いが 視点のズレを埋める

スタッフ同士のズレが起きてしまうのは、例えば、代表者等が「誰も拒みたくない、

一緒にこの場で生きあいたい」という想いを出していくときに、きちんと伝えるプロセスを持っていなかったり、ふりかえりによる意思共有がしっかりとできていなかったからではないのだろうか？という指摘がありました。

ある参加者は日々のふりかえりにおいて、スタッフ間で共有したかったこと、分かち合いたかったことを認識しあえていないと感じたそうです。それはスタッフがここでいられるために、そして周りの子どもたちも安心していられるために、「何をしなければいけないのか、何をしたらいいのか」というのが整理されないまま日々の現場を続けてきたことによるものでした。その結果、ズレの幅が広がってしまったそうです。

やはり、日々のスタッフ間での語り合い・コミュニケーションというものが、スタッフ間の視点のズレを埋め、相互理解を深める鍵となってくるのかもかもしれません。

【関連】 P.12・ 「語り合い」と「記録」それぞれの持ち味

### ..... 核になる理念の共有が大切

スタッフ間で語り合うときに、度々細かいブレが生じてくることはしかたないことだけれども、根っこの部分、1番核になる理念が同じであればブレが生じにくいし、多少ブレたとしても改善されやすいという



意見が出されました。

ある団体で核にしている理念として次の2つの話がありました。

1つ目にあげられたのは、「生きているだけですごいと思えること」です。被害を被ってしまった子ども加害者と呼ばれるやんちゃな子ども、共に今この時代まで奇跡的な確率で受継がれてきた「命を生きている」からということです。その生きているということにきちんと価値をおくことがまずは大切にすべきことではないかという考え方です。

2つ目には「すべては生きていくためのプロセスである」ということがあげられました。これは問題行動を始め、気になる行動をしている子どもが行動に込めた気持ちを理解し、その子がその子の人生を生きていくためにそのような表情や関わり方しかできなかった背景を大切にしようという考えからでした。必ずしも小さいころから同じような行動を続けているわけではなく、そうでもしないと生きていけない、生きてこられなかったプロセスというものがあったり、家庭の中の厳しい状況なりを言葉にできず、またあえて訴えることもしないけれど、物を壊したり、暴れたり、盗んだりしながら今日ここにきていることもありうるという考え方です。

【関連】 P.12・ 記録によって「核」を共有する

## スタッフの不安に寄り添う

どうすれば、スタッフ同士がお互いに安心して本音を話し合い、悩みや喜びを共有し合える関係になるのかということも話しにあげりました。

ふりかえりの中で、「子どもと関わっている自分（個人としての関わり方）をさらけ出す」ということに関して、仲間がその危うさを理解し、支えていかなければ、たいへん「痛む」ことになるという指摘がありました。

また、子どもの不安には寄り添おうとするのに、スタッフの不安には「それは、おまえの問題だろ」と投げ返してしまう傾向があるという声もありました。そしてそのようなことが多々ある中で、不安を訴えているスタッフにどれだけ寄り添えるかが大切になるのではないかという課題が出されました。

現場にいと、迷ったり揺れたり、時には泣きたいと感じることもあるそうです。その気持ちに寄り添い、受け止め合えるような関係性やまなざしをスタッフ同士でつくりあうことを大事にしているという話もありました。スタッフ間で「自分を出していいんだよ」というまなざしを向けあうことを大切に考えているそうです。

一方で、相手を思いやるといった上辺だけの、また馴れあったふりかえりをするだけでは重要なことが抜ける可能性が出てく

るので、スタッフと共に歩む意味ではダイレクトな議論も必要なのではないだろうか、そして違うなら違うでいいからその違いを明確にした上で、議論したほうがいいのではないだろうかという意見もありました。

【関連】 P.12・ ふりかえりと記録の結び付き

.....  
煮詰ったときは  
第三者の介入により整理することも

スタッフ間でのふりかえりが煮詰ったときに、第三者に介入してもらい整理したことがあるという報告がいくつかありました。どうしてもスタッフ同士だと、それなりの関係はあるし、蓄積も日常性という部分でも遠慮してしまう部分があるため話しにくい課題というものも出てきます。しかし第三者が介入することにより、スタッフ間では話せなかった感情のうごめきなどを遠慮せずに話すことができたり、煮詰った問題がどこにあるのかを冷静に見極めてもらったりして、整理することができるそうです。

第三者と共に進むふりかえりというものも、自分たちの活動や関わりなどを客観的に直すという意味で大切にしているという声もありました。

ちなみにここでいう第三者としてあげられるのは、スーパーバイザーだったり、研究者だったり、別の活動をしている居場所スタッフであったりと様々でした。自分た

ちの団体やその時々課題に適した第三者を見つけられるかどうかという話しになるので、普段からのつながりづくりが大切になるという話がありました。

【関連】 P.9・ 自己評価の重要性

.....  
迷いながらも  
一緒にいる覚悟を決める

外部から子どもの現場に関わっている研究者に講師としてきてもらい、第三者の目を通して「私たちにとっての専門性とは何か」ということを問い続けたという報告がありました。現場内だけではなくいろいろな人の話を聞いていくというプロセスの中で、結果として子どもと関わりあう現場にいる人が持ちうるまなざしのようなもの、自分たちが求めているものは、どこかの誰かの持っている学術的な専門性みたいなものに預けてしまうのではなく、結局、関わり続けるということなのではないかということに気づいたそうです。

つまり居場所の中での専門性とは、悩んだことをその分野の専門家に助けを求め、任せるのではなく、子どもと関わるなかで迷いながらも「そこに一緒にいるよ」という覚悟を決めることだという考え方です。いくつかの現場のスタッフや代表の人たちの声を聞き、直にぶつけてもらって自分たちがやっている仕事を確認していくプロセス

というのは、居場所スタッフにとって大きな手ごたえになるようです。

【関連】 P.17・ 記録やふりかえりは自分の想いを確認していくプロセス

### 自己評価の重要性

第三者評価というものは、その団体の専門性を高めるため、或いは居場所の活動を外部の人に知ってもらうために、研究者や行政の人に現場に入ってもらい、今後の方向性などの評価を受けるといったことをいいます。

その第三者が活動の記録をしたり、スタッフ同士の語り合いに参加し、感じたことやスタッフのとった行動の背景を共に探ったり語ることで実践をより多角的に見直すことも可能となります。第三者が現場に入ることによって活動が開かれたものになり、自立のかつ協働的な関係性をつくっていくこともできます。

しかし、第三者評価というものは「諸刃の剣」であり、「この団体のここはいい、なぜなら・・・」というように相対的に評価してくれる研究者がいる一方で、信頼関係が成り立っていないと、全く望まない、納得のいかない評価をされ、そのレッテルが張り付いてしまう危険性を持っているという話が出されました。

そのような魅力と危うさの両面をもつ第

三者評価ということを考える際には、自分たち自身で、自分たちの活動をどう位置づけるのか、どう考えるのかという当事者評価があつての話でなければならないという指摘がありました。当事者、スタッフとして、どうみつめるかという軸をもっていないと、第三者評価に振り回されるだけになってしまったり、資金提供者に対してモノをいえなくなってしまうということにもなりかねないという意見がありました。

つまり、団体としてなぜその対象に働きかけようとしており、なぜ現在の活動形態を選んだのか、実際に活動をしている地域の状況や子ども・若者の状況・ニーズとも合ったものなのかという視点が必要ではないかという意見です。あわせて、そこで働くスタッフ一人ひとりにとって、その団体に活動することはどういう思いがあるのか、また活動の内容をどういう風に考えているのかどうか等を自分で整理し、共有していくことの重要性も指摘されました。

団体として、或いは個人として、自分たちの活動が根ざしているもの、或いは目指していることを共有した上で第三者評価と向き合う必要があるのではないかという意見です。

【関連】 P.8・ 煮詰ったときは第三者の介入により整理することも

## 居場所における 「健全育成」という視点

### 居場所における 「健全育成」という視点と葛藤

社会の中で、不登校児やひきこもり、非行少年、障害児（者）と呼ばれる子どもたちは、見た目だけで判断され、学校できちんと関わってもらえなかったり、色々なところから追い出されるようなことが起こっているという話がありました。そして彼らは「気になる子」「悪い子」というレッテルを貼られているそうです。

そもそも、「気になる子」「悪い子」というのは社会が特定の子どもにつけたイメージであり、社会の中で作り出された子どもたちのようです。一方で、影で問題を抱えていながらもその子に関わる大人たちが気づいていない、また見えていないために、不安を抱えながらも「いい子」だといわれている子もいるそうです。

「気になる子」「悪い子」とレッテルを貼られている子も、「いい子」と呼ばれる子も、どんな状況にある子どもでも、自分なりに

自分の人生を良くしていきたいと思っている、という話もありました。

ある団体では、その良く生きたいと思っている子どもに対してどう支援するかということ団体の基本的なスタンスとしていて、いくら警察のお世話になろうができるだけ子どもの傍にいて、願いを叶えてあげたいという思いをもって関わっているそうです。

他方で、「気になる子」は排除するという動きがあるという報告もありました。「気になる子」がいること自体がしんどいと感じるスタッフや、「気になる子」が「普通の子」に悪影響を与えるのではないかと不安を漏らすスタッフや関係者もいるということです。またスタッフ間で議論するときも「自分が育ってきた中でこれは認められてこなかった。しかし、この場ではこれは認めよう」という結論に行き着くことがある一方で「気になる子は来させないようにしよう」ということもあるそうです。

【関連】 P.6・当然あるスタッフ間での視点のズレ

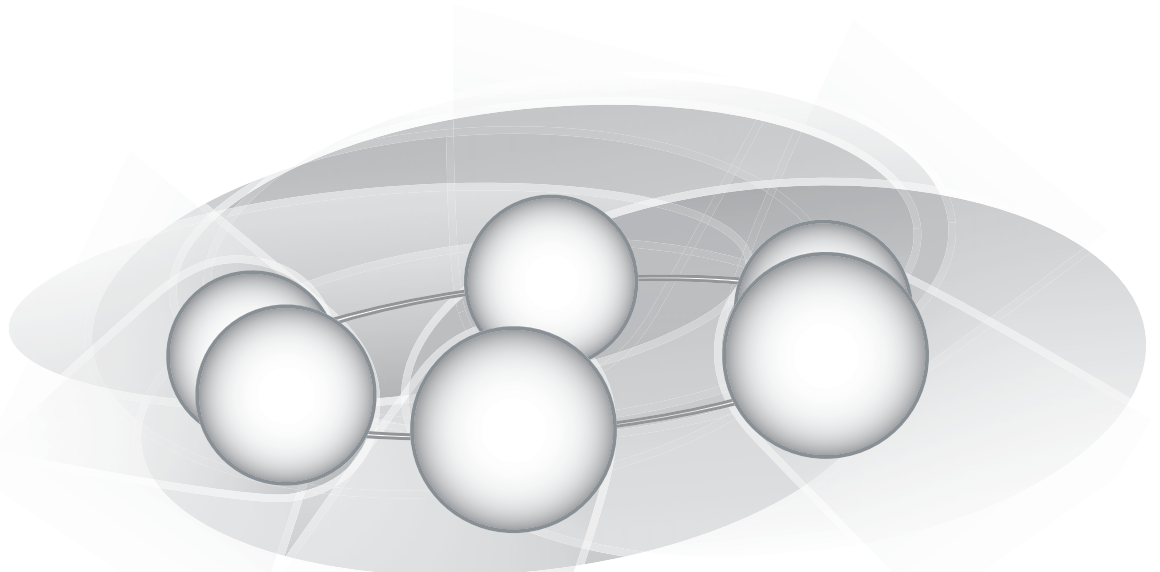
その子に「寄り添う」という関わり

居場所には、不登校やひきこもりを経験した子ども、非行少年といわれるような子ども、障害を持っている子どもも来ている事が少なくありません。居場所スタッフとして、そのような心の中に葛藤を潜めているような子どもに対してどのような付き合いができるのかを当面の課題としている人がいました。また、子どもたちはそれぞれ抱えている問題は違うけれども、何かを求めてそこに来ているのはみんな同じだと感じている意見もありました。

子どもが打ち明けたい問題、聞いて欲しい悩みを抱えているときに、スタッフが寄り添えられるか、そして子ども達が何かを求めてきたときに声をかけてあげたり、心配できる存在でいられるかが大事なのではないかという声もありました。表面的に子どもを捉えるのではなく、事実関係に留まらず、内面も含めて接していこうとしているようです。

どういう子が健全で、どういう子にするのが健全育成なのかと画一的、全般的に考えるのではなく、何かを求めてやって来る子どもたちに対してどのように関わるか、自分たちに出来ること出来ないこと等をスタッフ間で、話し合うことが何より大切なのではないかという話もありました。

つまり、健全か不健全かというわくに必ずしも囚われず、「唯一絶対的な『よい成長』」が存在するのではなく、スタッフとして壁にぶつかり揺れながらも目の前にいる子ども一人ひとりに対してその時々合ったかわり方、寄り添い方がどのようにできるかということではないかという意見がありました。





## 記録・ふりかえりの活かし方

「語り合い」と「記録」  
それぞれの持ち味

ふりかえりは「語り合うのか、記録なのか」ではなく、「語り合うことも記録をとるのも両方とも必要なのではないか」という意見が多く出ました。

語り合いには、本質や価値が明確になっていくというような良さもあるけれども、ある場面の状況について話し合っているだけでも曖昧になり、抽象化されてしまうという危うさをもっているという指摘がありました。また一般的に「こういうことってあるよね」という会話が成り立つが、それは実感ベースであり、根拠のうすいことがよくあるとも言われました。ところが、記録として文字に落とそうとすると、そのことを伝えるための事実、例えば様子だったり、姿だったりを書かなくてはならないため、シビアさというものが求められるのだそうです。そのため語ることはもちろん大事だけれども、具体的な内容でふりかえりたいときや共有したい時は、記録をはずせないという意見がありました。

## 記録によって「核」を共有する

また記録の利点として、スタッフ間で「核」の部分共有していくことができるということがあげられました。切り取られた状況が記録としてあれば、お互いの価値観はそのまま持っているながら、その場面についてどう思うか、この場面だったらどういう対応が出来るかという限定した話ができるからだそうです。場面を限定することで「こ

んな場面ではどういう関わり方の可能性があるだろうか」とか、「もしこの場面で私はこうせざるを得なかったけれども他にどんな可能性があったのだろうか」という話ができ、ふりかえりがより深い意味を持つことにもつながるという意見がありました。

【関連】 P.6・核になる理念の共有が大切

## ふりかえりと記録の結び付き

冒険遊び場などでは、「自由に遊ぶ場だから危ないって言っちゃいけないんじゃないか」というジレンマに陥ることがあるそうです。また本当は気にしているけれども、実際にそれが大事故につながるのかどうか分からないので一日中それを引っ張ってしまうこともあるそうです。そういうときに、楽しい雰囲気でもふりかえりが行われていると、「こんなこと言っちゃいけないのかな」と思ってしまう、ますます話せなくなってしまったため、問題が起こってしまったときのふりかえりの際、「やっぱり危ないと思ってたのよ」ということから内部分裂が起きてしまうことがありうるそうです。

逆に、毎日のスタッフ間での語り合いは、つらかったり、気になったことだけではなく、「あいつ今日かわいかったね」みたいなほっこり暖かくなるようなことも共有できるので、語ることの意味はとても大きいという意見がありました。

語り合う場を設けることは大切なものだけれども、スタッフがその場を活かすためには話し合いたいことや伝えたいこと、共有したいこと、それに一日の中で引っかかっ



たことは出し合ったほうがいいという意見がありました。そして、言い出せないことや忘れてはいけないようなことは一言でもいいから紙に落とすことも必要だという意見がありました。

また話しばなしにすると同じ話題であってもそれぞれお互い違った解釈で帰ってしまうことがあるため、それを一回紙に落として、「こういうことだったよね」と確認しあうことも大切なのではないかという声が聞かれました。

ふりかえりと記録は持ちつ持たれつの関係でもあるようです。

【関連】 P.5・ 文字に落とすことで自分と向き合える形にする / P.7・ スタッフの不安に寄り添う

#### 記録のとり方、活かし方

記録には様々な方法があります。しかし、その方法をたくさん知っているからといって、良い記録が取れるというわけではないそうです。「こういうことを今はっきりさせたいと思ってる」「これが自分たちにとっての壁だね」という思いの部分と「どのように書こう」という方法の部分は切り離して考えてはいけないようです。また、記録の方法そのものは、とりたいものによって決まるのであって、その順序を逆にしてはいけないという指摘がありました。それは、記録の方法ばかりに目を奪われると、自分の思いや考えたいことをきちんと残せない可能性があるからだそうです。自分の気持ちを大切に考えていけば、自分が知っている方法だけでなく、周りの人に聞いて回りながら、一番自分にあった方法を選ぶこともできるという意見がありました。

ただし、書式は難しいものなので記録をとりやすくするためには、「このようなときにはこんな方法がある」という情報を知っていることはいけないことではないようです。

記録は目的達成のための手法、手段であり、

記録の様式も大切ではあるけれども、まずは自分の気持ち、残しておきたい内容がきちんと表せられる記録をいかにとるのが大事という意見がありました。

【関連】 P.14・ 起こっていないことが書けてしまう記録の危うさ

#### 第三者記録で気をつけるべきこと

記録には第三者が記録をとるといった「第三者記録」というものがあります。これは現場にスーパーバイザーや研究者に入ってもらい、活動を記録してもらおうという方法です。この記録の利点は、「自分たちはこんなことをやっていたんだ」ということを客観的に見直したり、ふりかえることができるということです。また、研究者にスタッフ間で考えていること、思っていることを説明するためには、スタッフ間での相当なふりかえりが必要なので、第三者評価はとでも糧になるのではないかという意見がありました。

しかし、第三者として研究者が現場に入ってくるときには、「くくる」ということが避けられないという意見がありました。多くのスタッフは「くくられてたまるか」と思うのですが、「くくられる」覚悟をしなければいけないという指摘もされました。

研究者は理論的な枠組を前提として持っていることもあり、「一般的には」とくくる可能性があるのだそうです。スタッフは、自分たちの中で、どこかでくくってもいいことと、くくられては困ることを区別し、それを意識した上で研究者と意見を交わす必要がでてくるそうです。

そして第三者評価を入れる場合には、第三者記録と現場の記録をどうリンクさせていくのか、第三者記録を果たしてどこまで活かすのかということが検討課題としてあげられました。

【関連】 P.8・ 迷いながらも一緒にいる覚悟を決める / P.9・ 自己評価の重要性

## 記録とのつきあい方

.....  
記録をとることのワナ

団体の通信に“ある状況下での子ども達の会話”をだしているという事例がありました。この載せられた言葉というのは子どもが遊んでいるときの子ども達同士のやり取りをスタッフがノートを取り出して書き留めたものです。

この事例に対して次のような意見が出されました。子どもの言葉を記録していくことはその場面での子どもの一日の様子がとてもよくわかるので通信を読む人にとっても着目点としてはいいけれども、その書き留めている姿をみるとその場において、すごく違和感を持つというのです。そして子どもにとってはすごく迷惑なのではないかという指摘もされました。

記録というのはとる内容によって記録する時間や場所が決まっているということがいわれました。記録が報告書のための記録になったり、記録のための記録になったり、時には自分の活動を評価してもらいたいがための記録にもなってしまうというのです。目的や方法によって、記録が様々な意味合いを持ち、記録ひとつにしても見方によっては良くも悪くもとれるというのです。

【関連】 P.16・「子どものため」でもなく「自分のため」でもなく「子どもとのため」に

.....  
起こっていないことが書けてしまう  
記録の危うさ

記録の陥りやすい落とし穴として、記録はトレーニングされるとある程度かけるよ

うになるけれども、場合によっては、起こっていないことを書くことができるということが起こるそうです。それを避けるためには、記録を元に今日やったことがどうだったのかということスタッフ自身がふりかえり、「今の自分はどんなことを大事に考えているのか」、また「あの場面ではどういうことを大事に考えていたのか」ということを再確認する必要があります。

そして主観からしか切り取られない事実に対して、他者が見て感じ取った「あのときこうしてたよ」とか「私にはこういうふうに見えたのだけれど」というような違う視点、あるいはその関わりに関して「あのときこういうふうにしてたよね。どうして？」と、自分が無意識にしていたことを自分の記録、自分の意識の中にはめ込んでいくことが必要になってくるそうです。

もし、スタッフ同士で「見合う」ような関係ができないのであれば、いくつかの団体やスタッフ個人同士でゆるやかにつながり、見合える関係をつくっていくこともありえるのではないかという意見もありました。事実関係との距離をもって眺めてみたり、いくつかの事実を重ね合わせて眺めてみることで意識的に物事を見れるようになり、裏側にある別の事実が読み取れるようになったという報告がありました。

【関連】 P.12・記録によって「核」を共有する

.....  
記録に縛られないことも大切

何のために記録をとっているかという悩みが浮かんでも結局、記録というのは子ども

もとの関係の中で出てくるものだから、そのような悩みによって自分の役割を果たすことが辛く感じたり、つまらなく感じるのであれば、また記録をとることが負担になると感じるのであれば、無理に記録をとることを強要される必要はないのではないかという意見がだされました。

自分の仕事の中にゆとりが出てくると、子どもの姿も見えるようになってくるそうです。それができてくるとその子との関係を大事にしよう・向き合おうと思う気持ちから子どもとの関係性を支えるために記録がとれるようになるそうです。

記録を「とりたい」とか「とらなきゃ」ということに突き動かされるということはある意味、自分自身が危うさを抱えていたりするので、時には自分の中で記録のあり方を考え直す必要があるとのことでした。

【関連】 P.16・ 記録は「書き留めておきたい」という思いが大切

#### 記録は過去との対話手段

スタッフの育成、もちろん自分自身のこととして考えても、記録をつけただけでは育たないという意見がありました。何事においても記録をつけることが目的なのではなくて、それをどうするか、どう活かすかが重要となるようです。記録というのは自分自身の気付きのきっかけであり、記録をみることは、過去の自分と対話をしていることになるため、過去からのメッセージを拾い上げ、明日につなげていく力をつけることが必要になってくるようです。

#### 記録をとるにはトレーニングが必要？

記録というのはトレーニングが必要であり、トレーニングされると記録はとれるようになるという話が砂金堀に例えられてあげられました。砂金とは一回で拾おうとしても無理です。砂金というのは山ほど石ころや砂

を拾うなかで砂金がありそうだなと感じ、かぎ分けてやっと見つかるものなのです。そのプロセスは実際仕事をしていく中で起こってくる「書くことのトレーニング」と重なる、とのことでした。そしてトレーニングされた「書くということ」は、ふりかえるといって作業につながっていきます。

記録が取れるようになるということは、こんな記録がとれるようになりたいという願いからのものもありますが、実はいつの間にかこんな記録がとれるようになったということもとても多いようです。そのトレーニングに費やす時間をどういう形で確保していくのかというのはやはり組織や自分のなかで「記録」をどのように位置付けるかが重要で、その中で具体的にどのように時間を割けるかを考えていくことがよいようです。

#### とりあえずの一言でも

ある居場所ではボランティアも含めて個人単位で記録をどんなことでもいいから書いていった結果、スタッフが育っていることが実感できたという成果を話していました。

ボランティアの初日、「楽しかった」という一行だけ書いていた人でも、いろいろな人のいろいろな書き方で綴られている日誌を見て刺激を受け、内容や量が変わっていったそうです。そして、数ヶ月後には「自分もさんみみたいな日誌がかけられるように、ああいう風に子どもを感じられるようになりたい」とポロっと口からでてきたそうです。

他の所でも、アルバイトを始めて丁度一年になる人が、「1年前の日誌をみてみよう」と過去の記録を見直したときに「うわっ、しょぼい、なんだこの日誌は・・・」と自分自身で読み返してみても自分の成長の軌跡が振り返れたという、スタッフの育ちが日々の記録ひとつからでも発見できたという話をしていました。

【関連】 P.16・ 記録は「書き留めておきたい」という思いが大切

## 「子どものために」だからこそ 記録やふりかえりは続けることができる

「子どものため」でもなく  
「自分のため」でもなく  
「子どもとのため」に

記録やふりかえりは、子どもにいかに関わりうるかを見極めたうえでという「子どものため」というのが出てきやすいし、自分が追い込まれていると「自分のため」になってしまうことがあるとの指摘がありました。しかし、子どもにいかに関わりうるかを見極めるということは子どもの側も見極めているため、スタッフの力量を超えたような子どもは実は現れることがなく、スタッフが本気で踏ん張ったときに乗り越えられるか乗り越えられないかのような子どもが必ず現れてくるのだそうです。だから、そのときにそこから逃げないという気持ち、つまりどういった関係性を築くのかという問題とも重なってくるのだけれども、そういう子どもが現れたときにその子と向き合う覚悟できるかどうかというのが大切になってくるのだという意見が出されました。

スタッフがどの子どもと向き合おうと考えていると同時に子ども自身も関わるスタッフを選んでいるようです。そういう意味を含めても、記録やふりかえりは「自分のため」でもなく、「子どものため」でもなく、「子どもとのため」になるというのです。

このことは絶えず自分の中で問い続けないと流されやすいことでもあるので、「何のために記録をとるのか」という部分は常に心に留めていなければならないのではないかとこの声がありました。記録やふりかえ

りは「子どもとのため」といわれるように子どもとの関係の中でしか生まれないということです。

【関連】 P.15・とりあえずの一言でも

記録は「書き留めておきたい」  
という思いが大切

記録は、誰かに報告しなくてはいけないとかではなく、「書きたい、書き留めておきたい」という思いが大切なのではないかという意見がありました。一人ひとりが子どもと関わって感じたこと、自分の中での揺れや戸惑いなど、思いがあふれ出しているような記録というものが子どもとの関わりにおいて大切なのではないかと感じている方がいました。そして、日々の記録をスタッフ同士で見直すことで、「場」の状態が見えてくるのではないかという意見もありました。

スタッフが子どもとどのような関わり方をしているのか、現場がどういうふうに動いているか、どんなことが話題に上がっているのかということは記録を見ることで、イメージすることができることもあるそうです。また、記録したことを何ヵ月後かにもう一度見直すことで、一人一人がどんなことを感じてきたのか、どんなことを気にしていたのかなどをふりかえることができたという話がありました。そして自分がいつの間にかこんなふうに変わってきた、こんなことに関心を寄せるようになってきた



んだという気づきを得ることもできるという意見もありました。

【関連】 P.14・ 記録に縛られないことも大切  
/ P.15・ とりあえずの一言でも

.....  
記録やふりかえりは  
自分の想いを確認していくプロセス

「私は何をしたいのか」「なぜそこにいるのか」ということを確認していくプロセスが記録やふりかえりなのではないかという意見がありました。それぞれの現場で、スタッフ自身やスタッフの気持ちは仲間たちとの議論や様々なことを指摘し合い、揺れながらも日々育っていくものだという意見がありました。それは、何年やっても同じように揺れ続けているのだそうです。自分を高めたいとき、躓いた時、自分の足元が見えなくなった時、子どもに対して自分は「何をしたいのか」を絶えず確認していくことで自分を見失わないようになるとも言われました。

つまり、記録やふりかえりは、自分を問うことであり、自分を問い続ける覚悟をベースに自分の行動や想いを確認していく方法として記録やふりかえりを用いていくのだという意見がありました。

.....  
過去は未来に向かって開かれる

津守真の「過去は変わる。未来に向かって開かれる」という言葉が紹介されました。

記録を何度も読み返すことによって、過去の切り取られていた自分というものが意味あるものに変化し、そして今の自分にまで連なり、今の自分の意味づけをするそうです。「過去が変わって未来に向かって開かれる」ということをつくづく感じたという意見がありました。

現在居場所スタッフとして開かれている方が、実際に自分が中学生のとき関わってくれた大人がその時に綴っていた記録を後になって見せてくれたという話がありました。過去、自分がどのような環境にいて、何をしていたのか、そのひとつひとつが記録に残っていたそうです。

「こういうことをしていたんだ」とか「なんでそのとき僕はそういう思いで暴れていたのかな」というところも含めて、これから色々な子ども達と出会い関わる中で何を大切にしていけるかということと、自分はある程度で関わるのではなく、自分の中で検証しながら自分の子ども時代も含めて考えていかなければならないんだなということを考える根拠になったそうです。それは過去の記録をみたというのがとても大きかったそうです。

つまり大人と出会って生きてこれたんだ、きっと自分はそういう出会っていく大人になるんだという再確認ができたという意味では大人たちがとっていた記録というのは自分にとって大切なものであったという話をしてくれました。

## 居場所スタッフ育成の試み

～ スーパービジョンをもって関わる～

辰巳 朋子

京都府南青少年活動センター

相談関連事業専門員

### 自己紹介と臨床心理士のこと

私は現在、(財)京都ユースホステル協会(以下 KYH)の職員を週に2.5日、他は臨床心理士としてスクールカウンセラー等をして働いています。少し前まで、長くフルタイムの団体職員でした。また私が専門とする援助技術は、カウンセリング、グループワーク、レクリエーション・コーディネーターです。臨床心理士という資格は、名称が一人歩きしているようなところがありますが、私にとっては臨床心理士という型に自分を当てはめたのではなく、私の一部としてそれがあると感じています。

若い頃は、学校で将来のために学ぶというのが、なんとなく嘘っぽく思っていました。それで、人が集まって、その相互作用で学んでいくというか、成長変化していくような場面に仕事として関わるようなことをしたい、と思ったのが高校3年生。それがどんな職業になるのかわからないまま、そう思ったことを頼りに進路に迷っていました。

大学卒業時に、旧労働省が開いていた「勤労青少年指導者大学講座」を見つけました。働いている青年の問題課題を余暇活動支援やカウンセリング、グループワーク等の援助手法で指導援助する専門職を養成する事業でした。イギリスのユースサービスをモデルにしたような1年間のコースで、6ヶ月は東京での座学、残りの6ヶ月間は今でいうインターンシップで、企業実習と施設実習がありました。今はもうなくなってしまいましたが、この事業を作った方々の志の高さを感じられる、実践的で興味深い学習内容でした。自分で言うのもなんですが、この時はよく勉強しましたよ。

講座の終了後に採用試験を受けたのが、KYHです。KYHは、京都市から勤労青少年ホーム(現在は青少年活動センター、京都市は財団法人京都市ユースサービス協会に委託をして KYHはそこから受託)の業務委託を受けて、京都市内7つの施設に3名ずつ指導員を派遣していました。1巻に市職員3人と指導員3人がいるというスタイル(現在は館長1名、指導員4名、常勤アルバイト1名)で、複数の指導員がいるという恵まれた状況でした。その頃のホームの運営方針は設立当時の古いままで、現場で運営の見なおし案を作らせてくれました。

KYHでは独自に職員研修を行い、「ユースワーカー」養成を続けています。入って1年目に研修担当になって、最初にしたのは現場の職員でどんな技術を欲しいかを KJ法で出し合って、それをプログラムにしていくということでした。結構壮大な研修を実施してきたと思います。

私自身が現場でイチバン役立ったと思えたのは、カウンセリングの技術でした。当時



の勤労青少年ホームには、毎日ふらっと来る人やなんとなく来る人が結構いたのです。そんな彼らに声をかけて話し相手をしていたのですが、この過程で最も役立ったのが、対話と自己決定を支援する技術としてのカウンセリングです。また、講座や行事の企画実施や、サークルの結成・解散の話合い等の機会にも、この技術は役に立ちました。一人一人が、その場面・状況をどのように受け取っているかに関心を持ちながら、集団での意思決定を促進するということをしようとしていました。

働きながら学ぶというのは現場経験のない学生時代と違って、学んだことをすぐに実際に使ってみることができたり、自分の経験から講師へ質問することが出来たりして、とても手応えがあったのです。それで、カウンセリングの勉強を続けることができました。

勉強を続けていて、ちょうど資格が出来たので取ることにしました。資格をもつと、その仲間うちの勉強会も盛んで刺激されています。

今のKYHの職員には、大学の講師をしている人や社会教育の学会で発表をしている人、カウンセリングの資格を取っている人が複数いるんですよ。

### ..... スーパービジョンを知ってますか？

カウンセリングを勉強する中で、とても役立ったことのひとつに「スーパービジョン」という訓練があります。臨床心理士の養成過程で必須になっているほか、現職者でもこれが行われています。

その「スーパービジョンの定義」を3つあげます。

1つ目の定義は、「先輩の熟練した専門家が初心者に対して、専門家を育成するために指導すること。また技術体得のための実技訓練のこと」を指しています。

2つ目は岩間伸之が社会福祉の分野で言っていることですが、「ワーカー（援助者）の要請と暗いエントへの処遇の向上を目的として、スーパーバイザーがワーカーとのスーパービジョン関係の中で管理的・教育的・支持的機能を遂行していく過程のこと」です。「管理的要素は上司に任せて、教育的・支持的スーパービジョンあるいは責任を伴わない助言としてのコンサルテーションを外部（異職種・同職種）のスーパーバイザーやコンサルタントに任せる」という方法もあります。

3つ目の定義は深澤道子が心理分野で言っていることで、似ているコンサルテーションと比較したものです。「スーパービジョン、特に職場（職制）上のそれについては、受ける側スーパーバイザーはその指導に従うことが求められ、意見に相違がある場合、徹底的な討議が行われることが前提条件にあります。比べてコンサルテーションでは、コンサルタントが専門知識を利用してその見地からの指摘や指導を行い、『その専門知識を利用するか否か』についての選択権はコンサルテーションを受ける側にあります。」スクールカウンセラーが教員と事例検討を行う場合は、スーパービジョンではなくコンサルテーションと呼ばれています。

### ..... スーパービジョンの前提

スーパービジョンの前提には次のことがあげられます。まず、バイザー（ ）もバイジーもそれぞれ

バイザーというのは先生、相談に乗る人を指し、バイジーというのが相談者、その人についた人のことを指しています。

人間であるということ。この意味するところはお互い完璧ではないし、感情もあるということ。次にあげられるのは、それぞれ、よい仕事をして仕事から満足感を得たいという願いをもっていることです。バイザーはバイジーに期待し、励まします。バイザーは援助の全体像を理解していることが望ましく、バイジーは実際の援助の部分を取っているわけです。バイザーはバイジーの報告を聴き、尊重します。たとえ意見が合わなくても、たとえ失敗したとしても同じです。お互いに、バイザーの権威とバイジーの主体性を認め合うことで関係がなりたつのです。

ここで言うバイザーの権威というのは、地位というよりは経験や実績ということでしょうか。最も重要なことは、バイザーがバイジーの仕事が効果的に行われるよう、支援しようとするということです。チョッと素敵だと思いませんか。

スーパービジョンの原理も3つです。1つ目は、援助が利用者と援助者（バイジー）の相互作用によって実現されるということです。2つ目は、バイジーはその報告を聴くバイザーとの相互作用によって力づけられるということです。3つ目は、バイザーに支えられていることをバイジーが実感できれば、バイジーは利用者への援助過程でもエンパワメントされるということです。

### ..... スーパーバイザーとしての役割

青少年指導者がスーパービジョンを受けると、バイザーに期待され援助されることで、バイジーである青少年指導者が力を得て、その力をもって青少年に働きかけるという仕組みをもつこととなります。この仕組みは二重構造ですね。バイザーによって励まされて支えられた経験が、青少年、子どもたちを励まし、支えることにつながるということです。これは対人援助の仕事で、とても重要な仕組みだと身にしみて感じます。

社会教育や社会福祉分野の現職者は、専門職としての位置付けが弱いように思っているのですが、それはスーパーバイズという制度をうまくつくってこられなかったからではないかとさえ思います。

それらの現場では、管理職と現場職員の関係が、職種の違いや管理的な側面が際立っているように思えるのです。意見対立の話はよく聞きますが、管理職から励まされたと

#### <スーパービジョンの形態>

##### 1対1の個人のスーパービジョン

- ・ 1回1時間のことが多いが、「契約」によって様々なバリエーションあり。

【参考】：臨床心理士資格認定協会では「1事例につき1週1時間以上の定期的な事例検討を10週以上継続して行うこと」としている。

##### グループ・スーパービジョン

- ・ 複数のバイザーを対象に一人のバイザーが行う。いわゆる「事例検討会」。

##### ピア（個人）グループ・スーパービジョン

- ・ 仲間同士の「事例検討会」形式で、特定のバイザーなしに意見や情報の交換等を行う。
- ・ グループ・スーパービジョンの際に、バイジー同士で実技を行い、それに対してバイザーからスーパービジョンを受ける形式。

##### ライブ・スーパービジョン

- ・ スーパービジョン・セッションにクライアントを同行し、実際にカウンセリングを行ってそれに対するスーパービジョンを受ける。
- ・ トレーニングの中で参加者同士が実際にカウンセリングを行ってスーパービジョンを受ける・・・など。

という話はあまり聞きません。昨今、臨床心理士が担ぎ出されると共に批判されていますが、スーパービジョンを義務付けた初めての職種ではないでしょうか。実際に仕事をしながら、誰かに支えられる仕組みを持っている対人援助職の最初のケースだと思えるのです。

学校を卒業してすぐ現場に入った時に、そんなにいい援助ができるとは思えないのですが、現場で仕事をしながら伸びていく仕組みができていれば、チョッと安心です。

スクールカウンセラーの仕事の第1は教師へのコンサルテーションという見解があります。教師とは対等な関係ということでコンサルテーションと呼んでいますが、スーパービジョンを受ける体験をもつ臨床心理士は、教師と係るときに実際はスーパービジョンと同じ発想で関わっています。

つまり、教員に期待や信頼を持ち、元気になってもらうよう支えて、生徒たちへの働きかけが変わっていくことを期待しているのです。

.....  
 記録のあり方

京都市南青少年活動センターでは、いろいろな記録があります。職員が書くもの、ボランティアスタッフが書くもの、継続して書かれているものや特定の問題意識で一定期間だけ書かれる場合もあります。個人についての記録や事業についてのもの、何かの場面の記録もあります。

記録を書いていけばそれで物事がうまくいくということはありません。他の事業所と一緒にの検討会などに記録を出した時に、「よくやっているね～」とか、「よく我慢できるね～」という言葉は返ってきて、肝心の伝えたいところが伝わっていないことを思い知ることもあります。

昨年社会福祉領域の自立支援施設の方をお呼びして、記録のとり方をボランティアスタッフと一緒に考えました。今までは記録用紙に記録（観察）と所感（考察）の二分割だったのですが、それに加えて、その右側に「援助を考察する」と、「今後への合意」という2項目を添えました。今回はこのスタイルものを例に持ってきました。

この記録用紙の使い方は、まずその場にいた人が、記録・所感を書きます。さらに自分の援助を考察として書き加え、そして近くにいた職員・スタッフでさらに考察を進め、その過程で所感も増えていきます。いくつか今後への合意まで進むこともあります。さらに、月1回程度の会議で、その場にいなかった職員・スタッフも加わって、考察や全体の合意を作っていきます。

その場にいた関係者が記録をつけることでふりかえることと、その場にいなかった人もその考察に参加して一緒に考えることが出来る良さがあると思います。センターで書かれている記録を2つあげてみました。

1つめは、ロビーに来たやんちゃな青少年といかに関係を作っていくかを悩んでいた時に、職員が書いた記録です。やってくる彼等中学生に、「なまえは？」と聞いてもまともに答えが返ってこないし、本当の名前を言ってくれるわけでもありません。そのような状況で彼等から「他の大人と違う、自分に興味関心をもってくれる」と見てもらえるようになるにはどうしたらよいかを日々考えていて、その時々で合意や方針を作るために、また、後で振り返ることが出来るように一定期間の記録を残そうとしたものです。

2つめにあげるのは、フリースペースという主催事業のある日の記録です。ボランティアスタッフが活動日の終了後に観察メモを書き、それを人別にまとめたものです。一人一

人について見ていきたいという希望があって、時系列の記録からこのようなスタイルに変わりました。参加者が帰った後、1人ずつの参加者に対してこういうことがあった、こういうことを話したとかを紙に書いて、それをその日のディレクターがまとめます。そのまとめたもので月1回検討会をして、記録を元にスーパービジョンをするというサイクルです。この時のスーパーバイザーは私がしています。

## 居場所事業における職員とボランティアスタッフのあり方

居場所のスタッフの役割には、「一緒に遊ぶ」、「支援する」など様々な考え方があると思います。私達のフリースペース事業では、職員とボランティアスタッフという 類のスタッフがいますが、いずれも遊ぶを含んだ支援する人と位置付けています。

職員の年齢が居場所の参加者とちょっと離れているので、ボランティアスタッフには、年齢の近さや職員でないことを利点として、職員の代理ではなく、さまざまな意見や感性を発揮してほしいと伝えています。

私達が実施している居場所事業というのは、年齢制限や申込みもある人為的な場所です。特別な配慮を期待して、参加者は申し込んでいます。スタッフだけが参加するふりかえりや検討会も実施していて、自然な友人関係と異なるので、メールや携帯番号等を教えなないということを決まりにしています。それで不満を言われることもあるけれども、それに耐えてくれともいっています。教えてもらえないという寂しさが、いつかこの事業を卒業して他の活動へすすむような、チャレンジをする勇気につながってほしいという願いも伝えています。

## スタッフ育成

フリースペースは月に2回開催していて、担当職員1名とボランティアスタッフ10名、参加登録者20名弱の半数くらいの参加があるという感じです。不登校で活動の場を求めてとか、人間関係が苦手なので配慮のあるところとかが参加の動機です。ロビーにはやんちゃもいますので、両方のタイプを利用層としている点ではめずらしい空間を作っているかもしれません。

みなさんご存知のように、フリースペースでは色々なことが起こります。これらのことを、参加者もきっといろいろと考えているのですが、職員とボランティアスタッフは特別にふりかえりの時間をプログラムとして設定しています。ボランティアスタッフが感じたことや、職員が知っている参加者の以前との違い等も話題になります。しんどくなったり、自分が何かをやるうと関わっても、はずれたりすかされたりしたことが、その日のふりかえりや記録を書く時、書かれた記録をもとに検討する時などに、なんども反芻され、その場面への理解が広がったり深まったりしていきます。その上、今後の接し方についてもアイデアが出てきます。つまり一緒に考える人がいるという励ましと検討する機会を提供することで、今度参加者に会う時までには、どのように関わろうかと工夫する意欲が湧いてくることを期待しているのです。

例えば、フリースペースに来ている少年から「アルバイトをはじめたい」という話があった時のことです。スーパービジョンで私は、「始めてバイトをした時のことを思い出



してみて」とみんなに問いかけました。

初めての時の不安感とか戸惑い、心配なことというのは誰だって、同じように感じてきたのです。このような不安感とか戸惑い、心配なことというのは普段の生活の中でもあります。不安な時に周りの人になんて言ってほしかったか、どう接してほしかったか、それぞれの人の実感を思い出してもらいながら、今回のその人の事情も確認したりします。

月1回のスーパーバイザーとしての私の関わりは量としては少ないです。それでもスタッフの対応を記録を見て、成長していることに気づかされます。

施設の顔でもある常勤の職員に話を移すと、「私はこういうサービスができます」という強みを持っていることと、その強みを相手にどう伝えればうまく使ってもらえるかを考える日々です。利用者との年齢が離れれば離れるほど、若い人に遠慮や警戒をされるという面もありつつ、職員同士の持ち味を生かしあうような関係を見せることも必要でしょう。様々な記録は、さまざまの視点や努力、関係のあり様を伝えてくれる点でも重要です。

職員間にスーパービジョンを持ちこもうとした期間もあったのですが、疲れました。今年からは、京都市ユースサービス協会が職員用のスーパーバイザーを雇いましたので、その利用がおいおい進むでしょう。

職員として自分の持ち味を生かすことと、転勤もあるので自分がいなくなる時の準備もするという職場の事情の中で考えてきたことなので、主宰者による団体の場合と異なる感覚を持っているかもしれません。

.....  
 ●  
 どう関わっていくのか

人が人と関わる時、「なぜ働きかけるのか」も大事だとは思いますが「どう働きかけるのか」ということも大切だと考えています。

例えば、青少年がタバコを吸うという違法行為はやめさせるべきだとか、公共施設だから壊されたときは、警察に連絡をとるべきだということをよく言われてきました。

しかし私たちは、あるスローガンを設けています。それは「利用している人を施設から追い出さない」ということと「彼らに施設を使わせないと口が裂けてもいわない」ということです。自分たちの仕事は、施設を利用する人と関係を作っていくことであり、目の前にいる人と話合っていくことだとしたのです。なので、追い出して終わりにしてはいけない、そこから何を始められるか試そうとしてきました。

危ういことをはじめたという自覚はありましたので、記録をつけることで援助の枠組を保つとか、検討する姿勢を織り込むことで、危うさへの保険にしようとも考えていました。職員やボランティアスタッフの動きが、独り善がりではなく援助になっていくように、そうなっていくような方策を考えながらやってきました。

私達がして来た方法が良いと言いきる程の自信はありません。気がついていない幸運もあったことでしょう。今もまだ試行を続けているとしかいいようがない面もあります。それでも、学校だとか家とか、近くの公園にも居られない青少年がいて、彼等は私達のセンターにやってきているので、彼等のそんな時間を一緒に過ごしなが、私達にどんなことが出来るのか、見つけていきたいと思えます。

## 保育現場における人材養成とは？

### ～ふりかえりと目的にあわせた記録のとり方～

岡 健

大妻女子大学 家政学部 児童学科  
助教授

#### ●..... 保育とは援助である

保育の現場での記録というのは当たり前で、必須条件となっています。それは保育が援助だと言われているからです。むろん園によっては、この事を唱えながらやらせる活動に終始したり、あるいはこれを生き残り戦略の一つにしている園もあります。それでもなお「保育は援助である」と言う必要があるでしょう。

では、援助とは如何なるものでしょうか。

援助とは「子どもにいかに関わりうるかを見極めた上で、大人が願いを持って関わることである」と言われています。

ここで言う「大人が願いを持って関わること」というのは「指導」のことです。ただ英語で示せばそれは「ティーチング」や「インストラクション」という語ではなく「ガイダンス」という個別に対応するという意味を含んだ語になります。ただ20年たった今も指導と援助という言葉は境目がはっきりせず、ごちゃ混ぜになって使われているのが現状です。

また「子どもにいかにかかわるか」ということは、「子ども理解」を意味しています。保育の現場では子どもには関われない時や関わってはいけない時もあります。ただ保育や教育の場合は、基本的には意図的な営み・子どもを育てるという側面から逃げられないと言えるでしょう。もしかしたら、それが居場所と保育・教育の現場との大きな違いではないでしょうか。

#### ●..... 保育と教育の現場の相違

ただ、保育の現場と教育の現場にも差があります。

教育の現場、とりわけ教科指導においては、子どもが学ぶべきことが明確に教師の側で定められ、ではどうすれば一番効率的に伝えられるかを考えるという思考が一般的です。だから、「子どもにいかにかかわるべきか」が問題になります。

それに対し保育の現場では、子どもは基本的に教えられたことを学ぶという客体としての存在ではなく、自ら学ぶ（＝生きる）という主体的な存在として考えられます。ただそうである時、保育は当然「自律を他律でなす」という難問を抱え込むことになります。

したがって、保育の現場では学校の現場と同様、「目標」という語を使用しますが、そ



の語は基本的に「子どもの願いを大人が成り代わって提示している」ことだと捉えられているのです。

つまり保育では、多くの学校現場がそうであるように、教師の目標に引っ張り上げるという意味で「子どもにいかに関わるべきかを見極めた上で・・・」という考え方で「子ども理解」を捉えません。そうではなく、子どもが自らの目標を実現するための関わりを見定める、すなわち「子どもにいかに関わりうるかを見極めた上で・・・」という考え方で「子ども理解」を捉えているのです。

.....  
● 保育現場における「援助」のあり方

保育現場における「援助」のあり方を2つの事例で説明します。

1つ目の事例は実習生がある園で関わった登り棒に関することです。やっていくうちに、出来るようになった子が増えてきました。ある子は練習してもなかなか出来ませんでした。しかし練習の甲斐あって、ようやくできるようになりました。できた時、実習生は子どもと一緒に「やったね！」と喜んだというエピソードがありました。

子どもというのは、進級や誕生日などある年齢になると「自分で頑張ろう！」と思うようになることがあります。この事例の時、初めてその現場に行った人にとっては、他に登り棒に登れる子がいて、1人登れない子がいたとしても、気にはならないでしょう。しかし実習生や保育者は、子どもと毎日生活をしているので、子ども自身が今どんなことを乗り越えたいと思っているかを感じているので乗り越えられるようにバックアップします。これが援助であると考えられています。そして本来の保育のねらいとはそれが基になってつくられているのです。

2つ目としてねらいや願いがわかりにくい事例をあげてみます。

園の自由遊びの時にひたすら遊びを壊していく子がいます。この子は友達が遊んでいる所に行ってはわざと問題を起こしているのです。なぜ問題を起こしているかというこの子にとって「何か変わりたい、変えたい」という思いを他者に伝えるきっかけを作ろうとする行為なのです。壊すという行為の中に「自分の遊びが見つからないから」や「友達の遊びの中に入りたけれど入れない」という、何らかのメッセージ、子どもの願いが含まれているのです。子どもにはその気持ちを伝えるという手段が分からず、気持ちを伝える手段として遊びを潰したりすることがあります。その時に壊しているという行為だけを見

るのではなく「実はその子が育とうとしているんだ」と保育者は気付かないといけないとも言われています。

前述したように、保育におけるねらいは、「子どもに成り代わって立てているのだ」という風に言われたりしています。幼児の大半は自分がやりたいことを明確に言える子は少ないので、それを読み取らないといけません。それが「子ども理解」です。一般的には記録を取ることによって子ども理解が進められるのだといわれています。

.....  
「子ども理解」へのアプローチ

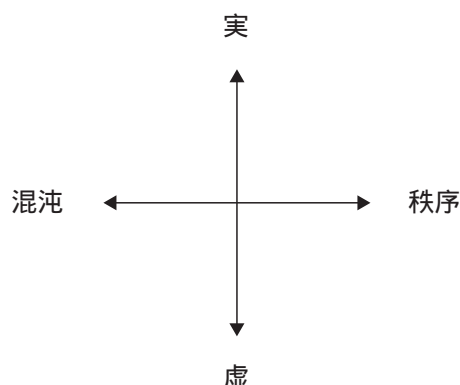
) 解釈論から

子どもの遊びは、子どもの意思でいかようにも進められているように見えますが、実は遊びやモノ（遊具や玩具等）、あるいは場や空間というものには、それ自体が要求する、いわばモノや遊び等が「こう使って欲しい」「こう遊んで欲しい」といった構造や性格といったものを持っています。

砂場を例にとってみましょう。

小川清美によれば、砂遊びは、まず大きく2つに分けられます。すなわち特に何を作るわけでもなく、ただ砂に触れるといった「始源的出会い」と呼ばれるものと、トンネルを作る・型抜きをするなどといった「意図的活動」と呼ばれるものです。この「意図的な活動」と呼ばれるものは、さらに次頁に示したような二軸の中で位置づけられることになります。

まず実と虚の縦軸ですが、「実」とは砂自体を作る対象と考えるもの（お団子、山等々）です。それに対して、「虚」とは、砂によって生み出される空間（トンネルや穴等々）を指しています。



次に「混沌 - 秩序」という横軸についてです。砂場は元々混沌とした場であって、その場で何かを作るというのは「秩序」に向けて動く活動になります。砂場において水は、ある程度の量なら砂を固める時の道具になるけれども、ある量以上の水が加わると、遊びを壊す方向へ動くこととなります。このことを始め、多くの活動が「混沌」から始まり「秩序」に向かい、そして「混沌」に落ち着くということを示しているのです。砂遊

びに関して、この「混沌」に向かわないと遊びを終われないということは砂遊びの中での典型的な特徴の1つです。例えば、プリン型の型抜きをしていた時に「お片付けよ」という声がかかると、そのままにするということはほとんどなく、元に戻したり、潰したりする姿は思い浮かぶのではないのでしょうか。

さらに砂遊びには、循環性という特徴もあります。例えば山を作った後に、山に水を流すというのは、「秩序」から「虚」へと遊びながら移行している活動なのです。

山を作って水をまさに今流し始めた子どもにとって、仮に片づけの声がかかったとしてもその時点ではまだ片付けるところまで意識が向けることは出来ません。映像の中で、穴を掘って、そこに水を満たし始めた4歳児7月の事例（虚の秩序から水を満たす事で穴が崩れるという混沌へと向かう活動）を見ていただきましたが、あの場合、新任の保育者は、子どもの気持ちに配慮しようと様々な言葉がけをしていましたが、結局はあの子どもは片づけに着手することなく、最後に手で砂を穴に埋めて砂場を混沌の状態に戻しました。つまり、砂遊びの構造を理解出来ていれば、あの状態の子どもへの在り様に対して想定することが可能になったと言えるのです。ちなみに片づけは、生活習慣の確立の一環として捉えられることが多く、この映像のような子どもは「いつまでも遊んでいる子」と見られがちになってしまうのですが、片づけには遊びの「かた」をつけるという側面もある点を見逃してはいけません。

いずれにしても、子ども理解をしていこうと思った時、遊びやモノのことを知っていると、子どもの遊びの状態がわかり、どんな気持ちでいるかが見えてきます。このことも必要であると考えています。

#### ）身体言語から

実習生は、飛び道具すなわち言葉を使って子どもと関わろうとすることがよくあります。

例えば、遊びに入りたそうにしている子どもがいると、大抵の大人は「貸して」「入れて」という言葉を教えてしまうのです。しかし、子ども達というのは、そのような言葉がなくても仲間に入ることができます。どうするかと言えば、周りの人のことを良く見ていて、その形をなぞるように中に入っていくのです。逆に言うと、いざこざを起こす子というのは、その流れを見ないで入ってくるから、いざこざが起きるのです。

こうした「からだ」への着目というものは、保育者も無意識のうちに多く利用しています。と言うのも、保育者は同時に30人前後子どもの保育に当たっています。したがって、遠く離れた子どもたちの今の状況を、記録の積み重ねからの想像だけで推測するには限界があります。そうした時、保育者は子どもの「からだ」に着目しているのです。

こうした事を意識化させようと、演劇的なワークショップのようなものを学生とやったことがあるのですが、そこで面白いことがありました。「子どもの遊びの場面を再現してごらん。」という、子どもの遊びの中では絶対にありえない光景が学生の演じている姿からはみられます。子どもの動きを良く見ていないからチグハグなのです。同じことを保育者に行くと子どもの動きを良く見ていることもあり、子どもに近い動きになります。それが、具体的に今自分の担当している子どもの場合であれば、なおさらそれに近い動きを再現できるようになります。保育では、音声言語をどう理解するかだけでなく、身体言語をどう読むか、ということも子ども理解には必要なことのように思われます。

.....

## 保育における記録の目的

記録の目的には次の4つがあげられます。

- ・ 備忘録として
- ・ 情報の共有として
- ・ 明日の保育の構想・構えのため（「子どもの育ちを括りだすこと」を含めて）
- ・ 自己考察のため

備忘録はメモ帳代わりとして使われる記録です。情報の共有として取られる記録というのはシフト制などの園で申し送りとしてとられたり、全体の様子を把握するため、また園内研修のときに用いる記録です。その他はまさに子ども理解をするのに重要になってきます。

### ）記録の重要性

実習生が「喧嘩が起きたときどうすればいいの？」など安全管理について迷うことがあります。実習生が実際に実習をしている時に、訪問したことがあって、その学生に困ったことはないか聞いてみると「雨が降った後の滑り台での場面で、一応拭いたが、まだ滑るかもしれないと思ったので、その時自分は手を貸すべきか、しない方がいいのか迷った」といっていました。そうすると一緒に話を聞いているクラス担任は黙っていられず、「それは誰？」と聞いてきました。名前を聞くと担任は、「君は大丈夫だけれど、

君は他に注意が行くと手元が危なくなるので気をつけてあげて。」などと、具体的な場面で自分はどうしていて、どのような行動をとったらいいかなどという具体的な指示を出してくれました。これは今までの記録が活かされた結果です。

また、記録が必須であるということはどうしてかということ、保育者の主体性や自律というのは、少なくともその人本人が関わった場面だから、それに対して周りの人が簡単に言えることではないからです。その人自身がどうしたかったのかということは大切にしたいし、その記録を元に、「先生はどうしたかったのか、それに基づく、その関わり方はもっとこうしたほうが良いんじゃないか」などと、具体的な事が意見し合えるから、記録は重要になってくるのです。

### ）目的や結果からの逆算

保育に携わる基本的な考え方は、「目的や結果からの逆算ではなく、積み上げが結果になる」ということです。

例えば、さきほど話に出した片付けの場面で、片付けができないという原因は、周りの動きに気付かないから出来ないということがあげられます。幼い子は視野が狭くて遊んでいるところしか見えていないから片付けられないのです。その子のある種の発達上の状態像があるとする、周りに「片付けだよ。」と言われた時、自分のやっていることにまい進していたとしても当たり前のことなのです。その子にいくら「いつまで遊んでいるの。片付けなさい。」と言っても、意味がありません。この子に周りを見る力が育ってくれば、人間には「私はこうしたいんだ」というその人ならではの思いがあるのと同時に、周りに合わせたいという欲求があるので、おのずと「周りが片付けているのだから、

自分も片付けたい」という欲求が出てくるようになるのです。そうすると、片付けをどうやってさせるかということを考えなくても、子どもも周りが見えるという働きかけがきちんとできれば「次はどうすれば良いか」というのがわかって、自然に片付けができるのです。

このように、育ちの括り出しということをすることで、具体的に子どもに関わっていく方向性が決まってくるので、そのために記録を取ります。目的や結果からの逆算ではないので、この場をどんな思いで過ごしているのかを探り出すために、記録を取っているのです。

#### ) 自己考察のための記録

保育者などは基本的には保育終了後に思い出し記録という形で記録を取ります。

以前、学生が観察実習に行ったとき、同じ子どものことを2人の学生が見ていたことがありました。2人の記録をじっくり読んでみると、同じ現場を見ていたはずなのに、見ている人の価値観や見る視点が違うだけで事実関係も違っているのです。記憶が曖昧であったり、自分の見たいところしか見ていないという風にも思えますが、実は観察実習の時はメモをとってもよかったので、メモを取りながら子どもの様子を記録していたのです。しかしそれでも事実が全く異なっているのです。

記録を見ることによって保育者がどのような考えをもって解決していこうとしているのか、どのような状況でどのような解決策をもっているか、またどのような関心を持っているのかがわかります。

我々人間は、実は見たいものしか見ていないのです。話の筋立てを私たちは頭で考えて、事実を曲げながら見てしまう。それが見ること・解釈することの本質だと言われています。では、なぜ記録をとるのかというと、そこには好む好まないに関係なく、記録を取る人の価値観が出てしまっているのです。価値観というものはなかなか自分では気付けないことなので、周りに自分の動きを問われる時に記録は必要になってきます。もともと子ども理解というのは、我々の解釈に過ぎないので、問い直される仕組みを設けておかないと、「子どもにとって良いことだから」などという理由で動いてしまいかねません。それに気づくために記録は必要になってくるのです。

#### ) 自己保身・自己弁護のための記録

記録をとる目的にも様々ありますがなぜとったのと疑問を抱く記録も多々あります。

私の教え子の記録を事例に考えてみましょう。私はまず彼女の記録を見て「なんでこの記録をとったの？」と聞きました。彼女の記録をみると、それは子どもを見ていた証拠物のように感じるのです。「何でこの記録をとる必要があったのか」を考えることができる。次にすべきことがみえてくるが、保育者の中には、証拠物のような書き方をしている人が多くいます。彼女が話してくれた内容は、「この記録は保護者会のときに親に“うちの子は何をしていましたか？”と問われるので、その時に“　　ちゃんは　　してたよ”と言えるための資料です」ということでした。このことから自分の身を守るために必死で記録をとっているように感じました。でもこのような記録をとりつづけると子どもをチェックしているだけだから、保育が楽しく思えないのです。子どもとの間で喜びも味わえないし、失敗して子どもに「ごめんね、こうすればよかったね」などといった保育者の醍醐



味が味わえないから、やつれていく。でも取らずにいられないから書きつづける。このような自己保身・自己弁護のための記録の書き方にもなりがちです。これはいうなれば、そこに自分の価値観が無意識のうちに出てしまった。彼女もそんなことはしたくないと言っていました。子どものために一生懸命保育したいと思いつつもこの記録を書いていたというのです。

取りっぱなしの記録というのも、気持ちが萎えていきます。自分で書くという行為で見つめ直せるということもいっぱいあります。しかし今言った「張り付いた価値観」というのは、自分だけでは見えないこともたくさんあります。だから、その時に「何で自分はこの記録をとるのか」を意識的に書くことで、1クッションクリアできる部分もあります。しかしそれも決められた形で書こうとすると、見えなくなってしまうこともたくさんあります。

.....  
● 記録の書式

) カルテ型記録

記録の目的に合わせた取り方の1つにカルテ型記録があります。

1人の子どものことをじっくり理解したいと思うならば、この方式を取ったほうが見えやすいとは思いますが。しかし子どもの姿を全部書こうとすると、さっきの彼女の記録のようになってしまいます。

カルテ型記録を作る場合、1人の子を1項目にし、その隣にタグシールをつけて1人の子の欄にして書くといいと思います。そうすると、その子1人の姿が通しで見えてきます。しかし、この場合は1週間位で全員の子が見れば良いな、くらいの構えでいったほうがいいと思います。

) エピソード型記録

保育の場面では、子どもの1つの場面を書くとき、

1. 自分が見ている事実
2. 事実に対する解釈
3. 解釈を導き出してきた根拠、願い
4. 自分が具体的に関わったこと
5. 関わったあと子ども達は怎么样了か

ここまでの枠組みを記録に残します。このどれかが欠けていると子どものことが見えにくくなります。そこを補うために「聞いていく」という作業は必要です。この補うという作業を行っていくと、人が見たときに「何でこの人はこの記録をとったのか」「この人はどうしたいのか、どう関わったのか、どんな思いで見っていたのか、どうしたいのか、それで子どもはどうだったのか」ということが言えるようになります。この記録をエピソード記録といいます。



## ) 環境構成図型記録

保育の現場というのは、毎日同じ場所に同じ子どもが来ています。子どもが面白いと思うと、ちょっとずつ変更しながらでも何日間か継続しています。子どもの姿をつかむとき、分布図をつくるという環境構成図型記録が便利です。地図をつくることで、子ども達の活動の仕方の違いがわかることがあります。

例えば、ままごとコーナーでいうと、床がじゅうたんなのか畳なのか、じゅうたんであったら毛足の長いものなのか、それとも短いものなのか、子どもの居場所の作り方も、1つ変わるだけで大きく変わります。子どもは触覚・嗅覚などで様々なものを感じています。子どもが何かホッとしたとき、落ち着かないときに子どもたちがどのような刺激を欲しているのか、違いがわかってくると思います。

また、匂いというのも子どもには重要です。保育所などで服が落ちてると、子どもは名前を見ないで服のにおいで確認します。だから、花1つ部屋に置くだけでもとても大事なのではないのでしょうか。

物や空間をどうするかというのを記録のなかで振り返るのは大切です。

## ) 会話分析

トランスクリプトの会話分析という第三者に頼る記録のとり方があります。

会話において、人間は意味内容だけを伝えているのではなくて、伝え方そのもので意味内容を伝えていることがあります。このことを文章に起こすというのはとても難しいことです。相手の話が全部終わってから話さず、話の途中で割り込んでくる人もいます。この記録を見ると、自分が意識しているのを超えて、自分の話し方に価値観が出てしまっていることがあります。間の取り方などこのような記録が関わりの場面でとられると、新しい発見、違った見方ができると思います。

特に居場所のスタッフは、相手が言ったことに対してすぐ間をおいてから話したすとか、相手が何か言ってすぐ答えるか答えないかみたいなどころがあります。例えば、他の関わっている教師や保育者と質の違いとして何が違うかということ、会話のとり方みたいなどころに出てくるかもません。それに現場の中で日常的に行うことは不可能なので、第三者記録と言われているものの中でありえるのではないのでしょうか。

# キーワード集

語ること(対話)と  
文字にすることの  
違いはなにか

情報の共有

ここに掲載している言葉は、参加された方の発言の中で  
特にキーワードになったものを書き出したものです。

語り合い(ふりかえり)で  
共有した(つもり)の内容を  
文字にすることで合意され、  
内容が明確になる

子ども理解

活動の展望

自己考察

ふりかえり・記録を持つ  
多様な意味

ふりかえりを  
文字として落とす意義

ふりかえりで何をどう  
育てていけばよいか

スタッフ同士の暗黙の領域が増えると、  
リスクに対する予測が甘くなったり、  
子どもに関わる事実についての見方で  
対立・分裂してしまう

自分の中に  
張り付いている価値観が  
子どもと関わる上で  
壁になってしまう

なぜ、  
記録とふりかえりが  
スタッフの力になるのか？  
力をつけるのか？

記録にすることと、  
スタッフ・スーパーバイザーとの  
関係づくりの関連性は？

記録は  
誰に向けての記録か

活動を共同でふりかえるときの  
パートナー(同僚・スーパーバイザー)との  
関わりの質

行政評価に対する記録

若手スタッフは  
ベテランスタッフからの  
育ちの援助に  
何を感じたか？

記録の  
とり方・活かし方

記録を  
どう活かすか、  
何に活かすか

子どものために  
記録をとる  
子ども + 記録者

どんな記録のとり方があるのか：  
「間・環境構成・スタッフ」の行動記録

誰と記録をとり、  
誰と共にふりかえるか

スーパーバイズの力を  
どう養うか？

スーパーバイザー・同僚と  
ふりかえりをするときの信頼関係は  
いかにつくれるか

書くこと自体が  
負担になってしまう

現場でどの程度の記録が  
作成できるのか？・・・  
記録に追われて  
仕事が回らなくなる

ツールとしての  
記録のとり方(方法)を  
知る

記録の中から  
課題を絞って検討する

「読んでみたい！」と  
感じる記録

ふりかえりの具体的方法を  
知っておくのもいいのでは？  
例)言い方や方法を変える等

<p>記録をツールとして： スタッフとの思いを共有したり、 価値観をめぐり語り合う</p>	<p>記録の意味： 説明責任にかかわる 何をどう具体的に 援助したいか</p>	<p>記録の意味： 情報公開と守秘義務</p>	<p>記録の意味： 場面に限定することで スタッフ同士の合意を つくっていく</p>
<p>「何のためにとるのか」 によって、 記録の形式が決まる</p>	<p>スタッフの 「暗黙知」「勘」を どう記録にできるのか</p>	<p>スタッフ間の 活動方針・目的・価値観をめぐる 葛藤・対立をどうするか</p>	<p>スーパーバイズの原則： バイジーに対して、 願い・期待をもって関わる</p>
<p>スタッフと共に 歩み育っている</p>	<p>一番信頼している スタッフとの 思いの共有とズレ</p>	<p>ふりかえりをする中で、 本当にスタッフに 伝わっているのだろうか？</p>	<p>居場所における 記録の可能性</p> <p>対話によるふりかえりと 記述によるふりかえりの メリットとデメリット</p>
<p>中心に立っているスタッフが まず何をしたいと思っているのか、 それを知りたい</p>	<p>行為におけるふりかえり、 行為についてのふりかえり 暗黙の知恵</p>	<p>援助の原則： 子どもに願いを 持って関わる</p>	<p>スタッフ同士の違いを 明確にする関わり方</p>
<p>その人の力量を (はるかに)超えた子どもは 現れない</p>	<p>私たちは 子どもを選びつつ、 子どもからも 選ばれている</p>	<p>僕らにとっての 専門性とは何か？</p>	<p>スタッフを支える2つのこと： 生きているだけですごい すべては生きていくためのプロセス</p>
<p>コアスタッフからの問い： 健全育成のためか、 非行防止のためか</p>	<p>第三者評価は「諸刃の剣」： 団体を上手にアピールできる一方、 活動をくくられることも</p>	<p>正論かどうかよりも 「私の話をきいてくれない」 という思いが壁をつくる</p>	<p>第三者と語り合い、 悩みを共有することで 拡散することができる</p>
<p>人が(団体が)変わるには？ 第三者から尊重されたという自覚が必要</p>	<p>自分が何をしたいのか： 自分の生き方の問題と 関わる</p>	<p>安心して語り合える 関係性</p>	<p>町内会・地域を利用： 自分たちの活動を 冷静にふりかえられる</p>
<p>第三者評価： 市民・行政・専門家</p>	<p>第三者介入の可能性： 冷静な評価、 客観的、詳細なデータ</p>	<p>方法を知ることと、 学び手の主体性を 確保することの 大切さ</p>	<p>ピアスーパービジョン： 仲間同士がどう語り合うか、内容でなく気持ち</p>

# 当日プログラム

【日時】： 2004年12月11日(土)～12日(日)

【場所】： 熱海ビレッジ(静岡県熱海市)

## 12月11日(土)

- |             |  |
|-------------|--|
| 10:00～10:30 | 受付   |
| 10:30～10:45 | 開会の挨拶・オリエンテーション  |
| 10:45～12:30 | 話題提供：辰巳 朋子氏<br>「京都南青少年活動センターでの居場所スタッフ養成の試み<br>～記録とその検討～」 |
| 13:30～15:00 | 話題提供：岡 健氏<br>「保育現場における人材育成とは？<br>～ふりかえりと目的にあわせた記録のとりかた～」 |
| 15:00～17:30 | 全体会  |
| 19:00～22:00 | 交流会  |

## 12月12日(日)

- |             |           |
|-------------|-----------|
| 9:00～12:30  | 全体会       |
| 13:30～16:00 | 全体会 ふりかえり |
| 16:00～16:30 | 閉会        |

## 参加者アンケート

現場を持っていることで様々な人が言ったこと、話したこと、想いなどが自分なりに整理でき、また落ちていったというところで、この場自体がやはり大きなふりかえりの場であったと思います。それとはまた別のところで、新しい知識なども含めて発見があり、それをまた現場に持ち帰って経験を通して落とし込みたい、というかいつの間にか落ちてくるんですね。

お二人の講演だけで、今の自分には充分すぎるほどの情報量だった。他の方の意見も吸収できるまでには至らずでした。まずは膨大な今回の「記録」をふりかえり、自分の中で(今の段階で)消化しつつ、身体的なステップで進めていきたい。今はパンパンの頭からこぼれ落ちないうちに何かから始めようかとワクワクしています。こういうフォーラムは「勉強になりました」で終わるが、今回はまず、今なにをしようかが分かったような気がしたフォーラムで本当に参加してよかったです。

それぞれの場で代表者、スタッフが揺らぐこと、揺らいでいる現状があるが、その揺らぐ力が、将来的に場のパワーに変わっていくこと。スタッフ、ボランティアをどう育てるよりも、そこでどう語りあい、育ち合うかという問い直しであったこと。

ふりかえりの「とことん語り合うこと」「専門性を高めるため、まなざしを問い直すための記録」という2つの側面がもつ重要さとジレンマが存在すること。ふりかえりが自然にできる、育ちあう場が居場所をつくる場のパワーなんだと感じた。

たくさんの方との出会い、たくさん言葉、笑いがあり、私は3回ほどぐっと涙がこみ上げました。日ごろもやもやしていたこと、上手く言葉にできなかったことも点と点でつながる感じがしました。自分ひとりでは考えもしなかったこと。気づいたこと。交流の場がなくては分からないことがたくさんありました。「裸の王様は早死にする」という岡さんの言葉にいろんな意味で身の引き締まる思いがします。これからも自分を深めていきたい。

居場所作りというものが盛んに言われるようになった今、これから居場所を作ろうとしている全くの初心者も参加できるといういいなと思った。前提となるレベルかが違うと進めるのが大変なんだろうと思うけど、およそ居場所とはいえないようなものを作ろうとしている人達が多いことを思うと、せめてこんな話をしてるのを聞くだけでも違うのだろうと思う。今回は今回のとして、そういう人向けのをやっているかも。

コンセプトはいいと思うけれど参加資格みたいなものが代表者やコアスタッフというところに限定されるようで他のスタッフやリーダーを誘いにくかったです。



## 実行委員会の活動記録

2004年

- 5月25日： 第1回・顔合わせと趣旨の共有、会場・時期の検討他
- 7月27日： 第2回・テーマ・本番のプログラム構成の検討他
- 8月25日： 第3回・本番のプログラム構成の検討他
- 9月15日： 第4回・会場の再検討、チラシ・広報の検討他
- 10月19日： 第5回・本番のプログラム構成の検討、参加者の事前アンケート検討他
- 12月1日： 第6回・参加状況・当日の運営の確認、報告書の検討

2005年

- 3月2日： 第7回・報告書の構成・内容についての検討

### (特) 青少年育成支援フォーラム (JIYD) とは？

～子ども達をもっと元気に輝くために、子どもと関わる大人を元気にする！～

私たちの団体は、子ども・青年（以下子ども達）が、以下にあげる5つの「財産」をもって成長していくことを目指しています。

- 無条件に受け入れる大人が一人でもいる、
- 眠り、遊び、学び、「居る」ことのできる 安全で安心できる場所、
- 心身ともに健康な生活習慣、
- 人のためになることをする機会、
- 社会人として自立できる技能、知識、価値観を身につける機会。

しかし、日々の活動のなかで直接子ども達と接することはありません。直接的に子ども達とかかわりをもっている NPOを始めとする様々な団体やスタッフを支援する、いわゆる中間支援 インターメディアリー で、支援領域を青少年分野に限定しています。

現在の具体的な活動は、以下の4つになります。

- 企業等と協働した資金助成事業
- NPOの運営技術支援事業
- 実践者同士の経験の共有や相互学びあいフォーラム事業
- ライフスキル・プログラムの普及事業

(詳しくは Website [[www.JIYD.org](http://www.JIYD.org)] をご覧下さい。)



---

居場所交流全国フォーラム2004  
- for Youth Alliance -  
事業報告書

---

編集・構成 (特) 青少年育成支援フォーラム (JIYD)

---

実行委員会	岡 健 嵯峨 所	大妻女子大学 家政学部 助教授 創平 (特) 環境文化のための対話研究
	嶋村 七沢 西野 萩原 福田	仁志 冒険遊び場・プレイリーダー 淳子 横浜市青少年交流センター 博之 (特) フリースペースたまりば 建次郎 駒澤大学 文学部 講師 房枝 (特) 日本子どもNPOセンター (特) 子ども劇場全国センター
インターン	森川 和加子 綾田 雄公	大妻女子大学 家政学部 中野区立上高田児童館

---

発行所 (特) 青少年育成支援フォーラム (JIYD)  
〒108-0074 東京都港区高輪4-10-63-302  
TEL. 03-3440-3373  
FAX. 03-3440-4447  
E-mail. info@JIYD.org  
URL. <http://www.JIYD.org>

---

発行日 2005年11月23日  
頒価 500円

---



**JIYD**